本棚

両角和夫　著

『合併からネットワークへ
―「農協改革」の課題―』

本書は、農業、農村、農協を巡る様々な問題について、独自の視点から、かつ実態調査を踏まえた研究を重ねてきた筆者が、三輪昌男の提起した「ネットワーク型農協」（農協が法人格はそのままにネットワークを形成して機能を合併する、新たな形態の農協）論を踏まえて、農協の組織、事業体制のあり方を正面から検討した力作である。

各章で関連する事項が丁寧に検討される。

第１章「農協をめぐる問題と対応の課題」では、新たな農業問題として、①食料自給率の大幅低下、②農業、農村の担い手不足、③中山間農業地帯の衰退、④農業、農村の多面的機能の低下をあげ、これらに対して、農協が取り組むべき課題を整理している。

第２章「農協の組織、事業体制と地域の持続的発展への貢献」は、アンケートにより、総じて農協は地域活性化に積極的でなく、専門部署が確立していない現体制では地域活性化への取組みは難しいことを示す。

第３章「『農協改革』をめぐる政府と農協系統組織」では、2000年代初めと今回の農協改革を分析し、前回は農業問題に対処するための組織・事業体制の見直しが検討されたが、今回は農業の成長産業化の促進を目的とし、農協系統による「創造的自己改革」も地域農業の維持・存続のための体制見直しについては明確ではないとする。

第４章「農協合併の推進と１県１農協のゆくえ」では、経営悪化の下、農協合併が推進されてきたが、１県１農協でも経営の安定、発展が難しいこと、地域の主体性の維持、地域農業・社会に寄与する体制構築などに課題が残るとする。

第５章から第７章では、三輪の「ネットワーク型農協」論を検討し、スペインのモンドラゴン協同組合を紹介したうえで、わが国の参考事例として熊本経済連による農産物販売ネットワークとそれを運営する青果物コントロールセンター、および北海道のオホーツク農協連合会を分析する。

これらを踏まえ、著者は、農協が地域の農業、社会の問題に対処するには、地域の実態を把握し、組合員の総意をくみ取って運営に活かすことが重要で、そのために多くの組合員が組合運営に参加し、かつスケールメリットにより効率性を高めうるネットワーク農協が力を発揮するとした。地域ごとに様々な機能合併、ネットワーク型農協のあり方が模索されてよいという。

農協を巡る状況は厳しく、効率性の追求は避けられないが、積み重なる組合員と地域の課題に十分に応えることが今、農協には期待されている。この２つの条件を満たす解の一つが、分権を維持できる機能合併、ネットワーク型農協である。

ネットワーク型農協には大幅な組織・事業の変革が必要というイメージを勝手に抱いていたが、実態に応じた多様な機能合併ならば、比較的事例の多い近隣農協との施設の共同運営なども含まれるかもしれない。

課題解決に向けて検討されている農協関係者に、本書を読んでいただきたいと思う。

――農林統計出版　2022年12月

定価2,800円（税別）248頁――

（特別理事研究員

斉藤由理子・さいとう ゆりこ**）**

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/